

necessary to adopt a market economy which negates such goals. The market reformers cannot offer a good explanation without calling into question the fundamental premises of Communist ideology. Besides, the army could rely on nationalistic sentiments by insinuating that the market reformers, who have to be internationally oriented because open economic policy is an important part of market reform, were the lackeys of the very imperialists the Vietnamese had fought against. When the "imperialist elements" such as the IMF and the World Bank request painful economic adjustment, anti-foreign sentiments win the hearts of many people, who suffer the consequences.

This is not the place to criticize the author's anti-market philosophy. To do so would take much space and not yield anything particularly new. The positive side of this book for the market-oriented economists is, as pointed out above, that it makes them reflect on the problems of market reform in Vietnam. Let me recapitulate by putting them in a comparative perspective. One problem is shared with China which, like Vietnam, promotes a market economy while retaining the Communist ideology: it is how to appease the opponents who argue validly that a market economy negates the basic tenets of Communism. Market reformers are vulnerable to the counterattacks of the old guard. The second is unique to Vietnam. Because it fought a long, difficult war, the army became a powerful organization, and it does not want to give up power when national priorities do not require it anymore. But by saying that the party is "on the verge of disappearing in all but name" (p. 165), the author seems to imply that market reformers will eventually win out. Even so, one wonders how fast (or slow) the pace of reform will be. But will the army really lose out? If so, what market forces will defeat it? Will money be a solution? These questions should be kept in mind in observing the future evolution of Vietnam.

(Yoshihara Kunio 〈吉原久仁夫〉・CSEAS)

Henk Schulte Nordholt. *The Spell of Power: A History of Balinese Politics 1650-1940*. Leiden: KITLV Press, 1996, 389p.

呪文に憑りつかれたごとく権力が作用するその過程を正確に綴ること、それを旨としたハंक・シュルト・ノルドホルトによる *The Spell of Power* が分析の対象にすえるのは、バリの王国のひとつムンウィの歴史である。王家の歴史を記したバリ側の文書から宣教師、貿易商人、旅行者、植民地政府の文書などヨーロッパ側の文書を踏破し、そのうえで自ら1年あまりのバリでの調査を行い、このオランダ人の著者は17世紀半ばの勃興からオランダの植民地体制が終結するまでこのヌガラがたどった「集団の伝記」を記述している。

文書資料への忠誠をつくすあまり、出来事の経過を単調に並べることに終始するきらいのあるオランダ人によるインドネシア歴史研究のなかで、この書物は明確な問題意識と事態をくっきりとした輪郭のなかに浮かびあがらせる記述力を持っている。一方、語られる事の経緯はわかりやすい枠組みへの還元を拒むきわめて錯綜したものであり、バリのヌガラがたどった歴史の複雑さを著者は描きえている。明解さと複雑さという両立し難いこのふたつの側面の記述を均衡を保ちつつ組織しえた繊細さこそ、この本の最大の価値であり、この本を読むおもしろさである。

希有のともいってもよいこの価値に著者がたどりつけたのは、手堅い事実関係の把握とともに王国論への反省にある。バリの歴史研究はもとより、王国論こそ彼の書物が貢献する分野であるわけだが、次のように従来の研究を整理して、自らの分析が依拠する立場を著者は明確に位置づけている。

ヨーロッパとアジアの出会いのなかで、王国のあまりの複雑さを前に、オリエンタリストたちが下した解決は彼らの歴史を静的なヴィジョンに吸収することであった。進歩なき停滞ないしは墮落の結果としてアジアの歴史を見るか、専制的な君主たる王が東洋的な搾取を企て、哀れな村落の民がそれに従っていると見るか、そのいずれかであった。植民地統治を正当化しながらアジアの歴史を代表＝表象するこのヨーロッパ人による歴史観に反省が加えられは

じめたのは、少なくとも蘭領東インドでは van Leur や B.J.O.Schrieke といった植民地時代後期の例外的な学者たちを除いて、脱植民地化が起こって以後のことであった。そして、Michael Adas のように「競合する王国」に焦点をあて、静的な見方にダイナミズムを取り戻す努力が結局いきついたのは、またしても王国の捉えどころの無さであった。最初の出会いでヨーロッパ人が感じた複雑さにあろうことか王国研究は再び回帰してしまったのである。

この袋小路に突破口を開いたのがクリフォード・ギアツによる劇場国家論であった。象徴的宇宙の地上の体现者として王を見るハイネ・ゲルデンの王国論を精緻化し、王を頂点とする階層性と儀礼をとおした象徴表現を描き出す彼の王国論は、捉えどころがないと思われた対象に美しい姿を与え、インド化された王国という現象を解明し、さらには政治権力中心の西洋の国家観に反省さえせまるものであった。

しかし、とここで野心に満ちた問題提議をハンク・シュルト・ノルドホルトははじめる。「劇場をこえて」を序の小題にかかげる彼は、劇場国家論の問題点をこう整理する。ギアツは模範的中心である王の聖なる象徴的地位を強調しすぎるあまり、王の世界とその他の村落レベルの社会関係を極端に切り離し、しかもギアツが対象にしている19世紀のバリで繰り返された闘争と暴力を完全に無視してしまっている。その結果、象徴的秩序対現実の政治関係、文化対権力、宗教対権力という二項対立は強化され、ヌガラを解く呪文である権力そのものの分析は放置されたままにおわる。そのうえギアツの劇場国家論は、オリエンタリズムに立ち戻る危険性さえはらんでいる。つまり、それぞれの位置づけはたとえば王と村落を切断して対置するギアツの議論は東洋的専制君主と村落の民を対置させるオリエンタリストの見方と同質であり、しかも闘争や暴力をとおして構築されていた村落のレベルにまでいたる王国の政治的流動性を凍結して、固定した階層的秩序を実体化したのは、安定した統治を目的とした植民地政府であり、その意味で劇場国家論は皮肉なことに植民地以前の19世紀のバリではなく1938年に完成をみる間接統治体制の分析となってい

まっているのである。王国を美学化し、精神的な世界として象徴的秩序を賞賛することでバリ社会を伝統文化に囲い込んだ植民地政府と同じ言説上の効果がギアツの分析には認められ、結局劇場国家論は植民地行政官たちのバリ文化への熱狂ぶりを反復する遅れてきた植民地主義的書物だったということになる。

では、ハンク・シュルト・ノルドホルトはどうするのか。彼が共感するのは、ギアツではなくむしろ銀河系のアレゴリーを用いながら王国を分析したS.タンバイアである。「象徴的秩序と社会行動が切り離しえるものではなく、むしろ意味のあるひとつの全体として両者が作用しあっている点をタンバイアは強調した。この見方はきわめて重要であり、この本をとおしてそれを指針としたい」(p.10)と述べる著者は、中心と衛星が相互に依存しあい、かつ闘争を内包するその政治関係が王国の構造の弱さであるとともに、この弱さを通じてはじめて王国が存在を許される点に着目する。そして、象徴的秩序の解剖と闘争をはらむ実際の政治関係の分析をひとつの全体的な枠組みのなかで共存させることを彼は自らの記述の目標にすえるのである。王が匿名の宇宙的存在にまで高められてしまうギアツの記述とは対照的に、王に個別性を取り戻し、通常のバリ人たちが彼の権威をどのように認め、なぜこの王を必要として、どうして王国の儀礼が重要であり、彼らがそこに参加する理由は何かを彼は解明しようというのである。そして、彼の儀礼にたいする視点がよってたつのは、儀礼に地位の抗争と人間の存在をめぐる秩序の表現を読むギアツにたいして、地震、火山の爆発、不作、伝染病が繰り返されるなかでヌガラに生きる一般の人々の生である。

序をふくめて10章からなる本書はほぼ年代順に記述は進み、各章前半部で王国の問題を全般的に扱い、後半部にムンウィの実際の状況が語られている。6章より以降、バリ社会と植民地統治の関係を特に著者は詳細に分析している。「『バリの伝統文化』なるものはほぼ植民地政府の介入の結果である」(p.13)と述べる彼の植民地統治とバリ文化の関係の分析は、インドネシア政府とバリ地方政府があたかもそれが自然に伝承された存在のごとく鼓舞することで完全に隠蔽している伝統文化の生成過程

を解き明かすきっかけを与えている。それと同時に、近年多数積み重ねられている植民地主義と文化の関係を論じる論考のなかでも彼の分析は傑出している。

ギアツの劇場国家論の登場以降、バリの歴史研究は活況を呈している。そのなかでも、ハंक・シュルト・ノルドホルトのこの本は間違いなくバリの歴史を語る決定的な一冊である。現時点にあって、誰もが読みうる言説として流通可能性を獲得したこの決定版に与えられる位置にわれわれは今後注目すべきであろう。バリの内部でも、儀礼という実践的な場で自らの伝統文化を再構築する動きが進んでいるためである。旧宗主国の歴史家の書物をバリ人がどう読むのか、また読まないのか。儀礼として再生産される伝統という名の歴史と学術的書物のなかで再構築された歴史とがどのような関係を演じるのか。その関係のなかでバリの社会とそれをめぐる言説はどのように絡み合い、誰が実践するどのような歴史的反省が誰に意味あるものとなるのか。オリエンタリストのように普遍性に自らが立脚する根拠を見い出すことをあらかじめ禁じられているポスト・コロニアル状況において歴史書は、たとえそれが決定版といえる精緻な言説であるとしても絶対的な客観性を勝ち取る資格はもはや奪われており、現実の社会のなかで実践的な意味が問われざるをえない。

ハーグの文書館で出会った当時、筆者にこの著者はバインダーで留められた手書きの文書を開ける時のそのインクの匂いがとても好きだと笑っていた。植民地行政官を勤めた経験のある東インドネシア社会の研究者を父に持ち、兄もまたジャワを中心としたインドネシア現代史の専門家であり、植民地時代からオランダとインドネシアの関係を生きた研究者一家のなかに育ち、嗅覚の体験を通して個人的な快楽さえ古文書探索に感じる根っからの歴史家であるこの著者にしても、バリでの調査経験から現在の古文書探索官は自らが探求する対象との近くてよりどころのない関係を生きざるをえないことに敏感だった。この書物が受容される現場を注意深く見守っていきいたい。

(永渕康之・名古屋工業大学)

Garrit J. Knaap. *Shallow Waters, Rising Tide: Shipping and Trade in Java around 1775*. Leiden: KITLV Press, 1996. X+255p.

Luc Nagtegaal. *Riding the Dutch Tiger: The Dutch East Indies Company and the Northeast Coast of Java 1680-1743*, translated by B. Jackson. Leiden: KITLV Press, 1996. 250p.

蘭領東インドの社会経済史研究では、1970年代半ばから Onghokham, R.Elson などによって19世紀半ば以降のジャワ島中東部を中心に、本格的な地方史研究が開始された。80年代に入ると M.R.Fernando, G.Knight らも加わって、強制栽培制度期のジャワを中心に、19・20世紀のジャワ・スマトラ島を対象とした地方史研究が盛んに発表されるようになった。これらの研究は C.Geertz の agricultural involution 論への批判を出発点としており、その中心的課題は、強制栽培制度が与える農村社会へのインパクト、およびプランテーションで使用される労働力の性格の解明にあった。¹⁾だがその後、世界システム論およびアジア間交易論の展開にともなって、研究テーマの重心移動が起きる。90年代半ばになると、17・18世紀のジャワ島および外島部を対象としたモノグラフが続々と出版されるようになるが、その課題は、ヨーロッパ勢力や外国貿易が在地社会に与えるインパクトと貿易構造の解明が主流となったのである。²⁾

1996年にオランダ王立言語地理民族学研究所から出版された上述2書もこの新しい傾向に沿うジャワ島北海岸部の研究である。両書とも全体を精読するよりは部分利用される読者が多いと思われるので、まず内容を略述した後に利用上の注意点を述べる。

- 1) 1990年代初頭までのジャワ島に関する研究動向は、宮本謙介『インドネシア経済史研究——植民地社会の成立と構造』京都：ミネルヴァ書房、1993. pp.4-38に詳しい。
- 2) 代表的なものとして M.C.Ricklefs. *War, Culture and Economy in Java 1677-1726: Asian and European Imperialism in the Early Kartasura Period*. Sydney. ASAA Southeast Asia Publication Series. 1993.; B.W.Andaya. *To Live as Brothers: Southeast Sumatra in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. Honolulu. University of Hawaii Press. 1993. がある。